

# 本土系瓦質土器の産地についての補論

—北部九州の瓦質土器と比較して—

Additional Study on the Production Area of Japanese Hard-tempered Pottery

瀬戸 哲也

SETO Tetsuya

ABSTRACT: The author previously named a type of hard-tempered pottery excavated in Okinawa as Japanese hard-tempered pottery. Such pottery is decorated with a series of chrysanthemum-pattern decorations, a characteristic particular to pottery from northern Kyushu. In order to clarify relations between Kyushu and Okinawa, specimens of both districts were selected and compared. Results show that a serial chrysanthemum pattern is a clear characteristic of the Kyushu products; however, few of them matched perfectly with Okinawa specimens. Considering the nature of the temper, some of the Okinawa finds must have been brought in from Kyushu. In any case, this Japanese hard-tempered pottery must have been made either in northern Kyushu or made locally under the strong influence from that region.

## 1. はじめに

筆者は、「沖縄出土の本土系瓦質土器」という別稿（瀬戸2004）で沖縄出土の本土産と考えられる瓦質土器を本土系瓦質土器と呼称し、その集成および若干の整理を行った。この瓦質土器の産地を考えるために、本土各地の類例と比較したところ、多くは北部九州産ではないかと推察した。しかし、その集成は十分でなく、器形や文様を表面的に比較したのみであった。

今回、沖縄出土の本土系瓦質土器の産地をより具体的に考えるため、北部九州地域の瓦質土器の中で類似するものを改めて集成し、幾つかは実見して個々に比較検討を行った。

## 2. 北部九州産と考えられる本土系瓦質土器

### （1）本土系瓦質土器の定義

本土系瓦質土器という概念は、筆者が沖縄で瓦質土器を整理するために使用したものである（瀬戸2004）。沖縄では那覇市湧田窯の調査により、17世紀代に瓦質土器が在地で生産されていた（金城1995・新垣2000）。一方、主に15～16世紀代を中心とするグスクや寺院跡で出土する菊花文が飾られる瓦質土器は本土産と考えられていた。筆者は、後者を主に北部九州のものに文様・器形等から類似するものが多いのではないかと推察した。しかし、胎土・色調等から沖縄産瓦質土器および瓦に類似するものもあるので、沖縄で模倣した可能性も含めて、本土系瓦質土器と呼称した。

### （2）北部九州産と考えられる本土系瓦質土器

別稿で記述したことと反復するが、沖縄出土の本土系瓦質土器の内容について該略する。今回は筆者が北部九州産ではないかと考えたものに絞って挙げることにする（第1図）。

器種としては、浅鉢が多く、他に深鉢・風炉があり、少数だが壺・甕等もある。

浅鉢（1～4） 第1の特徴としては、外面には径1.5～2.0cm前後の菊花文が横位に一周連続でスタンプされることである。これが後に具体例を挙げるが、北部九州に多く見られる特徴である。一方、大和を中心とする近畿地方では、菊花文を周囲全体に切れ間なく連続スタンプするものはない。

器形は、丸みのある体部（1～3）が多いが、直線的なもの（4）もある。また、口縁は直口するもの（1・4）もあるが、多いのは口縁端部が内側に伸び平坦面をなすもの（2・3）である。

深鉢（5・6） 5は口縁部で、6は底部であるが、首里城木曳門という同一地区から出土していること、胎土・色調が類似することから同一の個体と思われる。体部上半外面には2条の突線の間に、浅鉢と同様の菊花文が連続スタンプされる。器形の平面形は隅丸方形である。

風炉（7） 口縁部で、外面には浮き彫りにより柵状の格子文が施される。上端は部分的に突起があるタイプである。この風炉は、器形はかなり大和産に類似するが、内面調整がケズリを残すこと、胎土に砂粒が混じることから、大和産ではないと思われる。

その他（8～15） ここでは、器形が限定できない小片のものもまとめた。8は菊花文が連続スタンプされる丸みをもった体部で、小形の壺か風炉だろうか。9は線刻による斜線の幾何学的な文様が施された2条の突線を有する体部で、やはり風炉だろうか。10は菊花文が裏表にスタンプされたもので、鍋の把手と報告されている。11は同心円状の花文にスタンプされた口縁部で、浅鉢または風炉だろうか。12は2条の突線の間に菊花文が連続スタンプされた口縁部で、風炉であろうか。13は表裏に菊花文が全面に連続スタンプされた風炉等の脚基部である。14は非常に滑らかにナデ調整された玉縁状口縁をもつ甕で、外面全体には輪花型に浮き彫りされた文様が連続スタンプされる。15は風炉もしくは浅鉢・深鉢の脚部で、菊花文が間隔を開けてスタンプされる。

文様 沖縄で出土する本土系瓦質土器の文様には、格子文・雷文・花菱文・輪花文なども見られるが、今まで見てきたように圧倒的に菊花文が多い。さらに細かく見ると、菊花文の中央部の掘り残された隙間が、1・2・5・8・10・13・15のように0.5cm以内で花弁が細かく丁寧なものと、3・4・12のように0.5～1.0cmと中央部の隙間が大きく花弁もやや粗いものの2者がある。後述するが、この菊花文の細部の違いが、北部九州地域産であるかをより限定できうるものと考える。

胎土・色調・調整 外面の燻しが弱く、色調が灰色、または焼きが弱いのか橙色のものも多い。また、胎土は砂粒が混じるものが多く、金雲母片が混じるものもある。こういった特徴は、胎土は精良でほとんど砂粒が混じらない、大和産瓦質土器とは明らかに異なる。一方、4は灰色で砂礫が混じらない硬質（須恵質）のもので、肉眼では沖縄産瓦質土器や瓦と類似する胎土である。調整については、外面のミガキは5・6が丁寧であるが、多くはかなり粗雑である。内面はナデにより比較的滑らかである。ただ、5～7のようにケズリが内面に残されているなど、大和産のものに比べると調整は雑である。

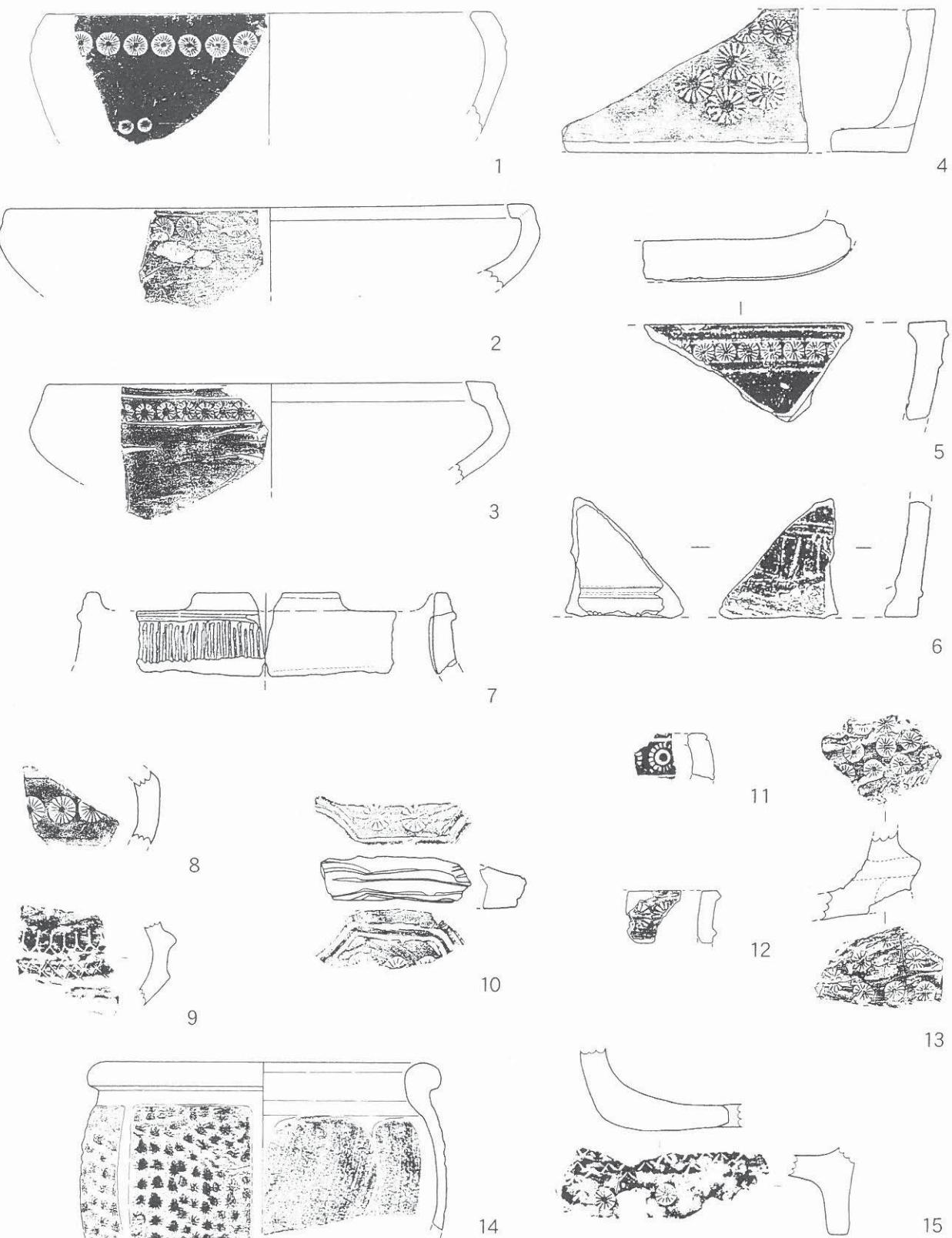
### （3）小結

北部九州産と考えた瓦質土器の指標としては、菊花文が主に横位方向に連続スタンプされることである。特に浅鉢にその傾向が強いものが多い。そこで、7の風炉のように大和産に近い器形でも、胎土に砂粒が多く混じることから北部九州地域で模倣されたものと考えた。

また、今回は具体的には触れなかったが、今帰仁城跡出土の瓦質土器には、大和産瓦質土器に近い特徴のものが少数ある（瀬戸2004、今帰仁村教育委員会1983）。それは、径3cm前後の大きめの菊花文が2・3個単位で間隔を空けて飾られる浅鉢で、胎土も精良である。この大和産のものを模倣した瓦質土器は、筆者が今回実見したところ博多遺跡群・大宰府条坊跡等で多く確認した。

## 3. 北部九州地域の瓦質土器との比較

瓦質土器は、その器形が日本本土でも非常にバラエティーあふれるもので、特に15～16世紀代のものは、全く同一のものを探すことが難しい。このことが、沖縄出土の本土産と考えられる瓦質土器を、



首里城奉神門（1）首里城御庭（2・3・13）天界寺（4・12・14）首里城木曳門（5・6）  
首里城廣福門（7）首里城北殿（8・10）勝連城二の丸北（9・15）浦添城（11）

図1 沖縄出土の本土系瓦質瓦質土器 縮尺1:4（各報告書より引用）

全て本土産と言い切るのに躊躇してしまうのである。そこで、北部九州地域の瓦質土器で、先述した本土系瓦質土器と類似するものを管見ではあるが実際に幾つか取り上げて検討する。

### (1) 瓦質土器の特徴

沖縄出土の本土系瓦質土器に類似するものとして、浅鉢を中心に器形ごとに挙げてみる。

浅鉢 (16~20) 16は丸みのある体部に脚付のもので、ほぼ完形であるので、その全容を窺うことが出来る。口縁は、その内側に短く伸び平坦面をなすタイプである。その外面には2条の沈線の間に連続スタンプにより菊花文が飾られるが、その大きさは径1.5cm前後である。17もこれに類似するが、菊花文の上下には沈線がなく、口縁も内側にはそれほど伸びない。18も口縁は内側に伸びない。19は体部がやや直線的なものであるが、菊花文の大きさは同様である。20は口縁が内側に長く伸び平坦面をなすものであるが、外面には雷文が連続スタンプされるもので、この点で沖縄のものとは異なる。

深鉢 (21・22・37) 21は口縁部で、2条の突線間に径1.0cm前後の菊花文が連続スタンプされるものである。22は底部で、破片で全容は不明だが沈線の上に菊花文がやはり連続スタンプされるものである。37は菊花文の連続スタンプの下に突線を挟み、波状文が施される。

先にも見たように、沖縄であまり深鉢が出土しておらず、同一の器形は今のところ見つけられていない。ただ、5・6のように菊花文が連続スタンプされるものは北部九州で多く出土している。

風炉 (23~28・33) その多くは小片で全容を窺うことは難しいが、窓部・脚部があるものなどをこの器形に含めた。

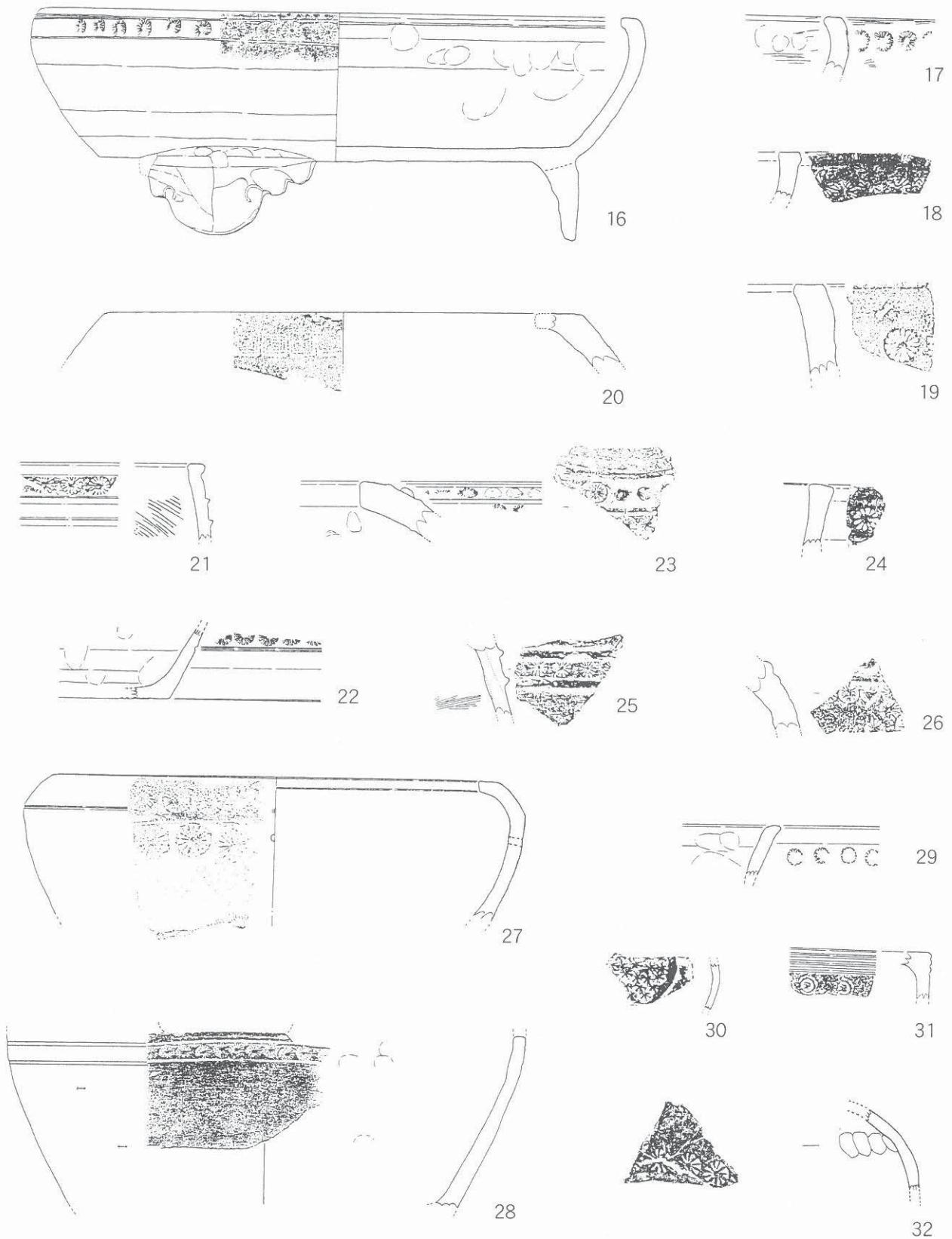
まず、菊花文を連続スタンプで飾るものとして23~28がある。23・24は口縁部、25・26は頸部であるが、どれも菊花文を連続スタンプするものである。27は浅鉢の可能性もあるが、小穴が見られること、深めであることなどから風炉と考えた。体部上半に菊花文が沈線を挟み2段に渡って横位方向に連続スタンプされている。28は体部の下半で、破片の上部に窓部があり、横位方向に1段の連続スタンプによる菊花文が施される。また、下部には脚部がつくようである。

一方、33は、口縁外面に浮き彫りによる凹凸で縦格子状の文様を施したもので、沖縄出土の7に類似するものである。このタイプは、先述したように基本的に大和産のものに器形自体は類似するが、胎土に砂粒を含むことなどから、やはりこの地域で模倣されたのものと考えられる。ただ、北部九州には博多遺跡群等で、大和産と考えられるものも出土している。

焜炉 (34・35) 首里城右掖門跡でいびつであるが菊花文を飾られる焜炉があり、断定できないが本土産の可能性がある(沖縄県立埋蔵文化財センター2003a)。一方、17世紀代に焼かれた沖縄産瓦質土器では、口縁端部内側に数個の突起をもつ焜炉が比較的多く見つかる。34は径3.0cm前後の大きな菊花文が施され、35は径1.0cm前後の小さな菊花文がそれぞれスタンプされる。沖縄産瓦質土器で多い器形が、全く同一ではないが、この地域でも出土することが重要である。

片把手付き鍋 (36) 36はいわゆる土師質焼成だが、首里城綾門大道跡で出土したものに類似するので挙げた(沖縄県立埋蔵文化財センター2003b)。沖縄のものは、燻しは弱いが瓦質焼成である。

その他 (29~32) 29は小さめの菊花文が連続スタンプされる口縁であるが、直線的に伸びるもので、器形は断定できないが、おそらく何らかの鉢であろうか。30は薄めの器厚で体部には丸みがあり、小型の壺・甕であろうか。体部には径0.5cm前後の花文が一面に連続スタンプされ、文様は沖縄出土の14と類似するように見える。31は口縁で、端部が内側に伸び平坦面をなし、体部は直立する器形である。外面には上端に3条の凹線が見られ、その下には同心円状の花文がスタンプされ、この文様は沖縄出土の11に類似する。32は丸みのある体部で、おそらく壺等の肩部にあたるものか。これも外面には横位方向に菊花文が連続スタンプされる。

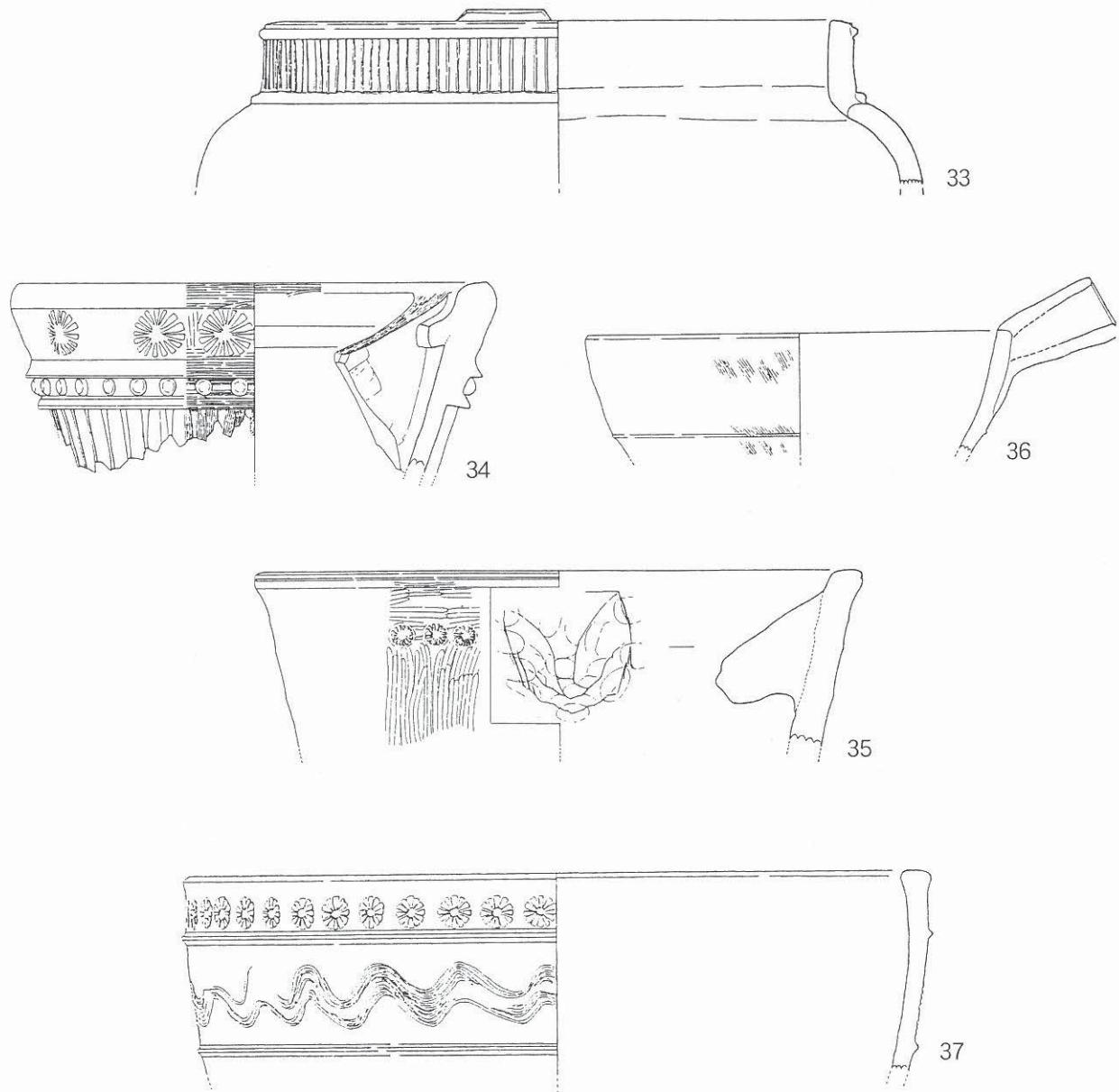


太宰府市連歌屋4次 (16) 太宰府市太宰府条坊50次 (17・18・23・25・26) 太宰府条坊111次 (22・29)

瑞穂町杉峯城 (19・24) 福岡市博多120次A区 (28) 東彼杵町小薙城 (20・27) 北有馬町今福 (30)

小郡市福童山の上 (32) 大村市坂口館 (21・31)

図2 北部九州地域の瓦質土器1 縮尺1:4 (各報告書より引用)



福岡市有田・小田部113次 (33) 太宰府条坊157次 (34) 太宰府条坊149次 (35) 福岡市野多目A 4次 (36)  
諫早市沖城 (37)

図3 北部九州地域の瓦質土器2 縮尺1:4 (各報告書より引用)

文様 この地域では菊花文以外にも様々な文様が見られるが、大和など他の地域に比べると、菊花文を密に連続してスタンプすることが多いのは確かである。菊花文の細部を見ると、径は1.0～3.5cmぐらいまで様々だが、全体に共通する点として花弁が丁寧で中央の掘り残しの隙間が0.5cm以内のものが多い。先述したように、沖縄出土のものでは1・2・5・8・10・13・15が類似する。

胎土・色調・調整 胎土は基本的に砂礫が10%前後混じるもの多い。また、実見できた博多遺跡群・有田小田部遺跡群・太宰府条坊跡のものでは、次の2者が特徴的であった。まず、17や35のように0.2～0.5cmと比較的大きな石英やチャート等の砂礫が20～30%と非常に多く混じるもので、これは沖縄出土のものでは確認していない。次に、16や33のように砂礫は0.2cm以下と小さく金雲母と赤色酸化粒が10～20%混じるもので、沖縄出土では5・6の他にも類似するものが数点あった。

色調は様々で、いぶしが良く黒色のものから、灰色や橙色のものまでもあった。調整は、外面はミガキ調整ではあるが、大和産のものに比べると単位も広く雑である。また、内面は丁寧なナデのものが多いが、33のようにやや雑でケズリが残されているものもあり、沖縄出土の7に類似する。

## (2) 瓦質土器の時期

さて、北部九州地域の瓦質土器であるが、共伴遺物から見ると大きくは14世紀代～17世紀前半に収まるものである。

その多くは、東播系須恵器・蓮弁文青磁・口禿白磁などの14～15世紀代の遺物が中心に共伴しており、連歌屋遺跡4次(16)、博多遺跡群120次A区(28)、太宰府条坊跡(17・18・22・23・25・26・29・34・35)がある。

一方、唐津初期のもの・明染付などの16世紀後半～17世紀前半の遺物と共に見られるものとして、沖城跡出土の37、野多目遺跡群出土の36、坂口館跡の21・31がある。これらは比較的共伴遺物がまとまっている例が多く、時期が限定できるものと思われる。

いずれにせよ、細かい時期を決定するのは非常に難しいが、大和産瓦質土器では15・16世紀代に瓦質土器の器形は豊富になること(佐藤1996)、沖縄出土の本土系瓦質土器も15・16世紀の遺物が多いが、スク等で出土することも、これらの傾向と合致している。

## (3) 小結

北部九州地域の瓦質土器においては、本土系瓦質土器に多い菊花文を連続スタンプするものは、かなりの量が見られることが再確認できた。ただ、器形等も含めて全く同一のものも確認できなかった。器形では、やや口縁が内側に伸び平坦面をなす浅鉢である16が、一番類似していると言えよう。実見したところ、胎土・色調・調整では5～7、菊花文の特徴では1・2・5・8・10・13・15が北部九州のものに類似している。しかし、4は胎土が沖縄産瓦質土器・瓦に類似すること、菊花文の中央部の隙間が大きいことなどから、沖縄で模倣した可能性も否定できない。

今回図示していないが、長崎県島原市森岳城では、沖縄出土の14の玉縁状口縁をもつ甕と、その丁寧なナデ、黒色に良く焼かれた点が非常に類似している、近世以降とされる脚付鉢を確認した(長崎県教育委員会2002)。また、沖縄産瓦質土器の擂鉢は備前を模倣したとされているが、胎土・色調は異なるが器形が類似するものとして長崎県壱岐観城の擂鉢を確認した(川口1999)。

いずれにせよ、沖縄出土の本土系瓦質土器は北部九州産のものが確実にあり、断定できないものでもその範疇にあると言えよう。ただ、北部九州では、文様は菊花文だけでなく、巴文や斜格子文や網目文なども多いが、これらは沖縄ではあまり見られないということも注意しておく必要がある。

## 4. まとめにかえて—本土系瓦質土器の産地についての課題—

本土系瓦質土器には北部九州地域のものに類似するものが多く、産地を限定できなくても、この地域の影響が強いことを再確認できた。しかしながら、全く同一の器形は確認できないこと、文様では菊花文だけが多いことなどは今後注意が必要であろう。時期については、細かく限定することは難しいが、出土遺跡の傾向からおおよそ15・16世紀代であることも再確認した。

今回も筆者の怠慢・未熟さから、表面的な比較に止まってしまったことを深く内省したい。しかし、沖縄出土の本土系瓦質土器、沖縄での瓦質土器生産を考える上で、日本本土の各地域の様相と比較することは必要と考えており、今後は沖縄産瓦質土器も考慮してより視野を広げて検討していきたい。

最後になりましたが、この小稿を執筆するにあたって、実見等において以下の方々ならびに諸機関にお世話になりました。記して感謝します。

山崎頼人(小郡市教育委員会)、城戸康利・山村信榮(太宰府市教育委員会)、川口洋平(長崎県教育委員会)、瀧本正志(福岡市埋蔵文化財センター)、佐藤亜聖

(せと てつや:調査課 専門員)

## 参考・引用文献

- 新垣 力 2000 「モデルとコピーの視点から見た窯業開始期の沖縄」『南島考古』第20号
- 浦添市教育委員会 1985 『浦添城跡発掘調査報告書』
- 沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－』  
1998 『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 a 『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』  
2001 b 『天界寺跡 I』  
2002 『天界寺跡 II』  
2003 a 『首里城跡－右掖門跡及び周辺地区発掘調査報告書－』  
2003 b 『綾門大道跡－首里城跡守礼門地区発掘調査報告－』
- 小郡市教育委員会 2002 『福童山の上遺跡4』 小郡市埋蔵文化財調査報告書第170集
- 勝連町教育委員会 1984 『勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－』
- 川口洋平 1999 「長崎県における周防・豊前系雜器の流入について」『西海考古』創刊号
- 金城亀信 1995 「瓦質土器」『涌田 II』 沖縄県教育委員会
- 佐藤亜聖 1996 「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』 IX XI 日本中世土器研究会
- 瀬戸哲也 2004 (印刷中) 「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える』
- 太宰府市教育委員会 1999a 『太宰府条坊跡 XI－第50次調査－』 太宰府市の文化財第42集  
1999b 『太宰府条坊跡 XII－太宰府条坊跡第149次調査－』 太宰府市の文化財第43集  
2001 『太宰府条坊跡 XVI－「鉢ノ浦」周辺の調査－』 太宰府市の文化財第52集  
2002 『太宰府条坊跡21－第156・157・158次調査－』 太宰府市の文化財 第61集  
2003 『連歌屋遺跡1』 太宰府市の文化財 第68集
- 長崎県教育委員会 1985 『今福遺跡 II－県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第二冊』 長崎県文化財調査報告書第77集  
1991 「坂口館跡・小蘭城跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VIII』  
長崎県文化財調査報告書第99集  
1995 「III 杉峰城跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書 III』 長崎県文化財調査報告書第121集  
1998 『沖城跡』 長崎県文化財調査報告書第143集  
2002 『森岳城跡』 長崎県文化財調査報告書第166集
- 今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡発掘調査報告書 I』
- 福岡市教育委員会 1990 『有田・小田部』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集  
1994 『有田・小田部第19集』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集  
1996 『有田・小田部第24集』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集  
1997 『野多目 A 遺跡 4－野多目 A 遺跡群第4次調査報告－』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集  
2002 『博多80－御供所疎開跡地道路関係埋蔵文化財調査報告書－』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集